



「老いても青春に生きていたい」
 ～老いをどう生きる①～

今から59年前、高校の文化祭でNHKラジオの人気番組、宮田輝アナウンスラー司会の「3つの歌」を模したイベントの司会をした。

誰の発案で、なぜ私が司会だったのかは覚えていない。講堂で全校生徒を前にどうすれば引きつけるかを考え、いがぐり頭ではあったが先生に赤いネクタイを借りて司会をした。

さて、伯父が裁判官をしていたので、何となく弁護士になろうと中央大学法学部を受験したが不合格。この時、担任の教師が文化祭の司会ふりを見ている。来年4月に日大芸術学部へ入学した。そこを受験したらと言われる。幸い合格。それから4年後にアナウンサーとして



司会をした当時の山高の講堂 (現在は資料館に)

山口放送に入社。つまり、私の進路は高校の文化祭で決まったともいえる。

去年11月、その高校の同級生から電話がある。来年は卒業して60年の節目、5月に東京で同窓会をするので日程を空けておいてほしい。司会をお願いする」と。



山高創立120年の同窓会の司会も赤いネクタイで (左)

そして今年2月、文書で同窓会の案内が届いた。そこにはわざわざ司会者として私の名前がある。さらに「これまでの人生でモットーとした言葉、感激した出来事、山高の後輩に送りたいメッセージをお願いします」とある。

同級生は皆、喜寿を過ぎた。ただ、集まって酒を飲むだけでなく、同窓会を思い出深いものにしたという幹事の気持ち

が伝わってくる。人が集う時、成りゆきまかせでいいという人もいるだろう。私はどんな小さな集いでも、温かい雰囲気づくり、集まった人への気配りを大切にすることを長い司会体験の中で学んだ気がする。

老いと誰しも体力の衰えは避けては通れない。平均寿命が延び、高齢社会を迎えた今、老いて死を迎えるまでの期間が長くなった。老いをどう生きるかが、人生において、い

や、この現代社会で大きな問題になっている。座右の銘としている村上のサムエル・ウルマンの「青春」の詩に目をやる。

「青春とは、人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う。(中略) 年を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき、初めて老いる。(中略) 人から神から、美・希望・喜び・勇気・力の靈感を受ける限り、君は若い。(中略) 頭を高く上げ、希望の波をとらえる限り、80歳であろうと、人は青春にしていむ。」

高校を卒業して60年、確かに肉体的に衰えた。しかし、青春は若いころだけのものではない。ウルマンが指摘するように、老いても希望・理想を持ち続ける限り、青春を共に生きていけるのだ。

60年振りの同窓会には赤いネクタイをして司会しよう。